ロータリー理念研究委員会発表・４号

「不易流行 －ロータリーの来し方行く末－」

ロータリー理念研究委員会
島　　正彦
（館山RC）

辞書によりますと「理念」とはすなわち「ある物事についてのこうあるべきという根本の考え」とあります。私は月信10月号執筆を担当するにあたり、表題にある2000-2001年秋元ガバナー年度、地区大会記念講演の音源に接する機会を得、その内容をご紹介することにより「ロータリーの理念＝Ideal of Rotary」について会員の皆様と考えてみたいと思いました。講演者はRI2580地区パストガバナーでありロータリーに関する多くの著作を残された故佐藤千壽翁です。

さて「不易流行」とは「いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと」であり、さらに「不易」とはいつまでも変わらないこと、「流行」は時代々々に応じて変化すること、と訳されます。

千壽翁は、ポールハリスの「This Rotarian Age」の『ロータリーは宗教でもなければ修行に代わるべき何物でもない、それはただ古くからの道徳観を現代生活なかんずく職業生活において実践しようとするものだ』と言う言葉を引用し、ロータリーにとっての「不易」とは「つまりロータリーは職業人としての人を作るんだ、こういう人づくりという人間育成という理念まで変えていいとは言っとりません。」と説かれ、「流行」については「変えていい、どんな革新にも応ずると言っているのは、その時代に即した活動の仕方或いは規則そういうものでございます。」と断じています。さらに、「変えてはならない理念はやはり職業人の倫理でございます。」とも結論付けています。

続いて2000年当時の社会状況について、企業論理が優先される為に陥る企業倫理観の荒廃や、環境問題、貧困問題、格差問題、青少年非行問題などを挙げ、それら多くの問題に対処するためには「この社会構造を根底から作り直さなかったらロータリーの奉仕の理想なんてったって気休めの歌声になってしまうだろうと思います。もちろんこういう問題は企業ばかりでなくて国民全体の意識にかかわってきます。したがって国民全体の意識から改革していかなければどうにもなりませんが、その意識革命の先導役として企業経営者や専門職業人の果たす役割を、我々はもっと真剣に受け止めなければならんと思います。」とロータリーの存在意義を説いています。

さらに、当時すでに普及していたインターネットや携帯端末のことに触れ、ロータリー誕生当時のフロンティア時代に似た、匿名性が高く専門性の高さゆえに新しい技術・知識をいち早く手に入れた者が他者に先んじて利益を獲得する時代の到来を予言し、その様な時代なればこそ職業奉仕の導く職業倫理の重要性で⇒があると訴えています。

続けて、「ポールハリスはあの当時『これからの事業経営とはのるかそるか、一か八かのような冒険では無い、関係するすべての人のすべての相手に対する公正で倫理的な行動でなければならない』と言っていますが、あれから70年経って今ロータリー100周年を迎えようとしている時に、ポールハリスの言ったおんなじ言葉を繰り返さなければならん。これはどういうことでございましょうか。」と嘆き、またポールハリスの『遠い辺境の地を調査して住み良い世界を作ろうなどと考えるよりも、社員の心に灯をともし希望と活力を掻き立てることの方がより良い奉仕の道である。そして実業人がまず第一に考えるべきことは働く人々にとってその職場と家庭環境が確実にその人達に幸福をもたらすようにすることである。』と引用し、「これこそまさにロータリーの職業奉仕の原点ではありませんか。わたしは何十年経とうとこれは不易の経営理念だと思っとります。人間愛に基づく職業倫理を棚上げしておいて、ただ資本の論理にだけ踊らされている、それでいいのだろうか。」と嘆いておられます。

この講演から15年経った現在、千壽翁の指摘された様々な問題がまさに現出し、場合によっては悪化している気がいたします、皆様はいかがですか。

参考資料

2000-2001年度地区大会記念講演
「不易流行 －ロータリーの来し方行く末－」

第2790地区ロータリー理念研究委員会
海寶勘一（千葉西）、平山勝巳（千葉若潮）、
大内　啓（柏南）、島　正彦（館山）、松田泰長（成田）